

研究ノート

映画療法が不安と自己概念に与える影響
—吃音治療への応用を踏まえた文献的検討—陳兪安¹, 青木瑞樹¹, 西野ひとみ¹, 宮本昌子²

要旨:本研究では、映画療法に関する研究論文を概観した上で、吃音に関連する「不安」と「自己概念」の資料を把握し、吃音治療に向け映画療法の応用の可能性を検討することを目的とした。選定基準に適合した35編の論文を対象とし、分析を行った。その結果、吃音者を対象とした結果も含み、映画療法が複数の障害・問題に効果があることが明らかになった。「不安」と「自己概念」に関連する心理面の問題を対象とした20編の論文では、映画療法の実施後に不安や自己概念に関する従属変数が肯定的に変化したことが示唆された。例えば、特性不安の緩和や完全主義の改善があり、これらに類似した効果は、映画療法による吃音への介入でも観察されていた。また、特に「自己概念」の変化を促す目的では、映画療法が吃音の心理面への介入に使用できる可能性があることが示された。今後は先行研究での方法を参考にし、吃音者に介入を行った研究の蓄積が期待される。

キーワード:吃音, 心理面, 不安, 自己概念, 効果, 映画療法

はじめに

映画は観衆に教育と新しい態度を提供する視覚的な隠喩を用い (Schulenberg, 2003), 長所を発見させたり, それを強めたり, コミュニケーションの促進及び希望を促すメディアである (Niemic & Wedding, 2008)。映画はクライアントに治療的価値があり (Schulenberg, 2003), 摂食障害 (Gramaglia, Abbate-Daga, Amianto, Brustolin, & Fassino, 2011) や不安症 (張, 2016) 等の精神・心理疾患の治療で用いられているのみならず, 人生の意味を学ぶ (曹, 2019) 等の心理教育でも用いられている。Berg-Cross, Jennings, and Baruch (1990) は「映画療法」という語を用い, 映画は症状への直接的な治療効果をもたらす, 治療過程において, その効果を促進させるために使用されるものであることを報告した。映画療法は単に映画を鑑賞するのみではなく, クライアントが個人あるいは集団で指定された映画を鑑賞することで, 自分自身の理想と, 現実的な問題を照らし合わせて内省し, 最終的には心理的な問題を解決できるような心理的成長を促進するものである (Berg-Cross et al., 1990; Dermer & Hutchings, 2000)。

上記のように不安等の心理的症状が映画療法の対象であるなら, 吃音の心理的側面の改善にも効果が期待されるのではないかと考える。成人吃音者においては, 40%以上の割合で社交不安障害を併存することが報告されて

おり (Blumgart, Tran, & Craig, 2010; Stein, Baird, & Walker, 1996), 非吃音者に比べ, 不器用でより無能であるというスティグマがあることも報告されている (Blood, Blood, Gabel, & Tellis, 2003)。Azios, Irani, Bellon-Harn, Swartz, and Benson (2020) は吃音のある成人を対象とし, 4週間の映画療法による介入により, 認知面や感情面にどのような効果があるのかについて検討した。その結果, 質的分析からは, 脆弱性, セルフ・スティグマが軽減し, エンパワメントの育成, 自己調整, 所属意識が増加したことが明らかにされた。量的分析からは, 社交不安の軽減, 吃音に影響を与える生活の質の改善が明らかにされた。この研究は対象者4名での予備的で先駆的な研究であり, 統計的に臨床的效果が明らかにされたわけではないが, 比較的短期間での映画療法の介入により効果を認める事例の報告であった。参加者は毎週, 各自で指定された吃音に関する映画を鑑賞し, その後にクリニックでセラピストと映画について話し合った。セラピストは最終的に, クライアントが映画の登場人物の問題解決に至る過程を言語化しながら, 自身と照らし合わせて認知的・感情的側面に変化を起こさせるような枠組みと質問を用意していた。

一方, 吃音の治療に用いられる認知行動療法 (Cognitive Behavioral Therapy; 以下 CBT と略す) は認知, 感情と行動の関連性を強調する (Fenn & Byrne, 2013)。現在, 多くの先行研究で, CBT が吃音者の認知の変容や不安の低下, 積極的なコミュニケーション態度の醸成, 自尊心

¹ 筑波大学大学院人間総合科学学術院

² 筑波大学人間系

(連絡先) 陳兪安: 筑波大学大学院人間総合科学学術院 (〒305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1)

情、問題解決能力及コミュニケーション能力の向上といった感情や行動面の改善をもたらすことが明らかにされている (Gupta, 2016; Menzies, Onslow, Packman, & O'Brian, 2009)。映画療法の認知の変容を促すことを目的とする点では CBT と一致し (Moulton, Heath, Prater, & Dyches, 2011), CBT による介入の一部分としても役立つ可能性がある (Yang & Lee, 2005)。しかし、吃音に関する映画療法の研究論文は Azios et al. (2020) の他に見当たらず、吃音の分野で十分に認識された介入方法とは言えない。

そこで、本研究においては、映画療法に関する文献レビューを行う。抽出される論文数が少ない可能性があるため、英文誌、中文誌、和文誌を検索の対象とした。さらに、抽出された研究論文のうち、吃音にも関連する「不安」、「自己概念」の問題を扱う論文を選択し、効果検証に用いられた尺度、介入に用いられた適切な映像作品と介入効果を確認する。「不安」を取り上げたのは、Azios et al. (2020) の研究結果を参考にし、映画療法による吃音者への介入結果として、吃音に関する役に立たない考えと信念の評価尺度 (UTBAS) における吃音に関する不安の項目の得点と総得点という量的側面の変化が顕著であったことを理由とする。同研究の半構造化面接で得られた発話の質的分析から、脆弱性、セルフ・ステイグマが軽減し、エンパワメントの育成、自己調整、所属意識が増加したことから、「自己概念」にも注目した。このような文献研究をとおして今後吃音のある人への適用可能性を探ることを研究目的とする。

方法

本研究では、映画療法に関する研究論文を概観することを目的の一つとしている。その際に分析対象とする論文を、1) 実験的研究 (ランダム化比較試験等)、調査研究、単一事例研究、質的研究のいずれかであること、2) 質的あるいは量的なデータを用いた分析が行われていること、3) 英語、中国語、日本語で書かれていることの3点を選択基準とした。

1. 論文の検索方法

まず、映画療法に関する論文を抽出するために以下の(1)~(3)の要領で検索キーワードを設けた。

(1) 英文誌

PubMed, ScienceDirect 及び Web of Science を使用し、「cinematherapy」のキーワードで検索をした (最終検索日 2021 年 7 月 11 日)。

(2) 中文誌

CNKI 及び Wanfang Data を使用し、「电影疗法 (映画

療法)」または「电影治疗 (映画治療)」をキーワードとし、全文検索をした (最終検索日 2021 年 7 月 11 日)。

(3) 和文誌

CiNii 及び J-Stage を使用し、「映画療法」または「シネマセラピー」をキーワードとし、全文検索をした (最終検索日 2021 年 7 月 11 日)。

次に、「不安」と「自己概念」に関連する心理面の問題を扱った論文を抽出するために、上記の基準により抽出された研究論文を対象とし、再選定を行った。まず、*Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 5th ed* (APA, 2013; 以下 DSM-5 と略す) の不安症群を参考にし、「不安」と「パニック」をキーワードとして設定した。次に、自己概念は広い概念で、その中に自尊感情が含まれること (大仁田・三成・崔, 2012)、自尊感情の類義語に自己受容及び自己評価があること (Hattie, 1992)、自己概念と相関するものとして自己効力感 (富岡, 2013) があること、吃音臨床では吃音者の反応や態度にポジティブな捉えが必要であるとされること (Guitar & Bass, 1978) から、再検索のキーワードを以下①~③のとおり設定した。

①英文誌

「Stuttering OR Anxiety OR Panic OR Self-esteem OR Self-acceptance OR Self-evaluation OR Self-efficacy OR Positive」

②中文誌

「口吃 OR 焦虑 OR 惊恐 OR 自尊 OR 自我接纳 OR 自我评价 OR 自我效能 OR 积极」

③和文誌

「吃音 OR 不安 OR パニック OR 自尊感情 OR 自己受容 OR 自己評価 OR 自己効力感 OR ポジティブ」

2. 分析の観点

まず、基準に該当し抽出された論文の刊行年、研究デザイン、さらに対象とされた症状、評価方法と実施結果の情報を項目別に記述した。

さらに、心理的問題に対して映画療法がどのように実施されたのかについて、抽出された論文内容を整理し、映画療法の吃音治療への応用の可能性を検討した。そのために、介入目的、研究の実施方法の情報と使用された映像作品の情報 (年代、題材、映像作品が制作された国) を項目別に記述した。

結果

映画療法に関する研究論文の基礎的情報に関する結果を表 1 に示した。英文誌においては、PubMed から 8 編中 1 編、ScienceDirect から 28 編中 9 編、Web of Science

から45編中10編が抽出され、それらの中から、重複する6編を除外し、13編を分析対象とした。中文誌においても同様に、CNKIから17編中4編、Wanfang Dataから61編中6編が抽出され、重複する2編を除外し、8編を分析対象とした。和文誌においては、CiNiiから2編中1編、J-Stageで3編中1編が抽出され、重複する1編を除外し、1編を分析対象とした。

さらに、論文の一部分に映画療法によるデータが用いられていたにもかかわらず、キーワード検索で抽出されなかった海外誌論文13編を追加し、最終的に35編(36ケース)の論文を分析対象とした。1編(張, 2008)のみ、2症例の症例研究であることから、本論文では「編」と「ケース」に分けて記載した。

また、「不安」と「自己概念」に関連する心理面の介入を行った映画療法に関する先行研究の概要を表2に示した。「不安」と「自己概念」に関連する心理面の問題を扱った論文の再検索において、キーワードを題目または抄録に含む論文を検索した結果、15編が該当した。残りの20編のうち、キーワードに関連した検査を心理面の評価として用いた論文7編を加え、「不安」と「自己概念」に関連する心理面の問題に関係しない2編を除外した。最終的に20編の論文を分析対象とした。

1. 映画療法に関する研究論文の基礎的情報

介入研究35編のうち、エビデンスレベルの高い、ランダム化比較試験(RCT)が実施されたのは6編(17.1%)であった。6編の文献が対象とした問題は、「ストレス」(Abedin & Molaie, 2010), 「不安症状(生活から学業までの全般的な不安)」(張, 2016), 「挫折」(曹, 2018), 「家族関係」(Haddad & Shechtman, 2019), 「自尊感情」(Batubara, Sari, & Eagle, 2020), 「向社会的行動」(Herfidawati, Wibowo, & Purwanto, 2021)であった(表1)。

対照群との比較において有意差が認められた研究で対象とされた問題は、「向社会的行動」(Herfidawati et al., 2021), 「自尊感情」(Batubara et al., 2020), 「ストレス」(Abedin & Molaie, 2010), 「挫折」(曹, 2018), 「不安症状(生活から学業までの全般的な不安)」(張, 2016)であり、一方で、「家族関係」(Haddad & Shechtman, 2019)においては、映画療法を行った群に家庭内の衝突の改善は見られたものの、カウンセリングのみを行った群との有意差は認められなかった。

2. 映画療法に関する研究論文の基本属性

映画療法に関する研究論文の基本属性に関する結果を表3に示した。

映画療法を介入方法とした研究論文35編の内、2001

年から2010年に発表された研究が8編(22.9%), 2011年以降に行われていた研究が27編(77.1%)であった。

年齢別で未成年者(18歳未満とした)を対象としたのは36ケース中15ケース(41.7%), 成人(19歳以上とした)が21ケース(58.3%)であった。そのうち、青年期(13歳から22歳前後)(服部, 2000)を対象としたのは24ケース(66.7%)であった。

使用した映画の数については、表3のとおりである。36ケース中5ケースに使用された映画の数は不明であった。あとの31ケースにおいては、平均5本が用いられていた。最も多くの映画を使用したケースでは26本を使用し、最も少ないケースでは1本の映画が使用されていた。実施方法については、集団療法36ケース中32ケース(88.9%), 個別の映画療法が4ケース(11.1%)であった。

映画療法の対象者については、疾病や障害のある者についてはDSM-5(APA, 2013)の分類に従い記載した(表3の「神経性やせ症」から5項目が該当)。疾病や障害のない者については論文に記載された表記をそのまま使用した(表3の「恋愛中の者」から以下4項目が該当)。疾病や障害のある者のうち、最も多く報告されたのは、「不安症群」(13.9%)であった。疾病や障害のない者については、「特定の教育活動を受ける者」(13.9%)が最も多く報告され、小学生への道徳教育や医学生への心理社会的側面の教育等が含まれていた。次に「葛藤のある家族」(11.1%)が多く報告された。「その他」(38.9%)には、ストレス、挫折、自尊感情、完全主義、共感、向社会的行動において問題となる者、または1ケースの中に単独ではなく、複数の心理的な問題のある者が含まれた。

3. 「不安」と「自己概念」に関連した心理面の介入を行った映画療法

「不安」と「自己概念」に関連する心理面の問題を扱った論文における効果の評価方法と介入結果の一覧を表2に示した。

再抽出された論文20編の介入目的の対象を、不安7編、自己概念8編、その他6編に分類した。そのうち、経(2011)の論文では治療対象が単一ではなかったため、複数のカテゴリーに分類した。不安を介入目標とした7編の全研究が映画療法の介入による効果を報告したが、効果検証には3編(Rimonda, Wibowo, & Jafar, 2018; 張, 2016; 郇, 李, 2016)が共通した自己評価式不安尺度(SAS)を用い、その他4編には各研究で異なる尺度が用いられていた。学業の不安が2編(Rimonda, Bulantika, Latifah, & Khasanah, 2020; Rimonda et al., 2018), 学生の生活から学業までの全般的な不安が3編(Dumtrache, 2014; 経, 2011; 張, 2016), 合計5編には介入前後に有意差があっ

表 1 映画療法に関する研究論文の基礎的情報

対象とした問題	著者(言語)	刊行年	実施方法	治療の目的	作品数	研究デザイン	結果
パニック障害	響(日本語)	2001	対象者：45歳のパニック障害者1名 方法：集団映画療法週2回	不安の軽減	3本	症例報告	映画療法によって、パニック障害の症状が改善されたことが報告されている。
家族関係	Biemann, Krieger, & Leifer(英語)	2003	対象者：13～18歳の女子15名 方法：集団映画療法月1回	葛藤の解決	15本	症例報告	映画療法の過程で、対象者は家族への抵抗感を次第に失くし、心を開くようになり、心の葛藤を解決していくことが報告されている。
複数の心理的な問題	Powell, Newgent, & Sang(英語)	2006	対象者：平均年齢11.29歳の行動問題を持つ児童16名 方法：介入群：3週間の集団映画療法+3週間の心理的問題の解決能力を養成する課程 対照群：6週間の心理的問題の解決能力を養成する課程 遅延介入群：3週間の心理的問題の解決能力を養成する課程+3週間の集団映画療法	自己概念の修正	1本	ランダム化によらない対照群を用いた比較試験 & クロスオーバー試験	対照群と比較すると、介入群・遅延介入群ともに自尊感情(RSES)は改善されたが、介入前と介入後1週間の追跡評価では有意差がなかった。しかし、「自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている」「私ははげっこう長所があると感じている」という2点においては、介入群において介入前と介入後1週間の追跡評価で有意差があった(p<.05)。
完全主義	Aka(英語)	2007	対象者：心理学系大学生34名 方法：介入群：集団映画療法6回(映画鑑賞+完全主義資料の配布) 対照群：集団映画鑑賞6回	完全主義の修正	1本	ランダム化によらない対照群を用いた比較試験	両群(介入群・対照群)とも介入後に完全主義(MpS)が明らかに改善(p<.01)されたが、群間差はなかった。追跡調査では介入群が対照群より効果が維持されたことが報告されている。両群(介入群・対照群)ともYoung Schema Questionnaire(YSQ)は介入前後で有意差はなかった。
複数の心理的な問題	張(中国語)	2008	対象者：心理的な問題を持つ大学生20名 方法：介入群：集団映画療法8回 対照群：映画鑑賞	自己概念の修正/ 幸福感の向上	4本	ランダム化によらない対照群を用いた比較試験+質的事例研究	対照群と比較し、介入群は介入前後で自己効能(GSES)が改善されたが有意差はなかった。主観的幸福感(SWB)のうち「生活への満足感や幸福感」「ポジティブ感情の高さ」という下位因子が明らかに改善された(p<.05)。インタビューデータからは、全員が感情・認知・人間関係において、多くの援助を得られたことが報告された。
ストレス	Abedin & Molaie(英語)	2010	対象者：軽度知的障害児の母親30名 介入群：集団映画療法週1回、合計10回 対照群：介入なし	自己概念の修正/ 抑うつの改善	3本	前後比較デザイン+質的事例研究	抑うつ(SDS)・自尊感情(RSES)は介入後に明らかに改善された(p<.05)。インタビューデータからは、自己認識を高め、前向きな気持ちになれたことが読み取れた。
ストレス	Abidin & Molaie(英語)	2010	対象者：軽度知的障害児の母親30名 介入群：集団映画療法週1回、合計10回 対照群：介入なし	ストレスの緩和	1本	ランダム化比較試験	対照群と比較し、介入群は介入前と介入後1ヶ月間の追跡評価を比較し、両親のストレス(PSI)が明らかに改善された(p<.05)。
複数の心理的な問題	余, 張(中国語)	2010	対象者：14～18歳の非行少年16名 方法：集団映画療法8回	自己概念の修正/ 抑うつの改善	4本	前後比較デザイン+質的事例研究	介入後、自己受容(SAQ)・自尊感情(RSES)が明らかに改善された(p<.05)。インタビューデータからは、感情・認知・人間関係において新たな見解を得られたことが読み取れた。
家族関係	Marstiek(英語)	2010	対象者：親の離婚を経験した10～12歳の児童3名 方法：個人映画療法	対処行動の習得	6本	質的事例研究	インタビューデータから、対象者全員が自分の感情をより深部から表現し、親の離婚に対処する新たなスキルを身につけたことが読み取れた。

表1 (続き)

対象とした問題	著者(言語)	刊行年	実施方法	治療の目的	作品数	研究デザイン	結果
摂食障害	Gramaglia, Abbate-Daga, Amianto, Brustolin, & Fassino (英語)	2011	対象者：40歳の摂食障害のある女性 方法：6ヶ月の入院期間に集団映画療法	怒りの状態と性質、 表出方法の修正/ 性格の変化/ 摂食障害の改善	26本	単一事例研究	介入後に状態-特性怒り尺度 (STAD)・気質と性格 (TC)・摂食障害傾向 (EDI-2) が改善され、介入後1年の追跡評価でも効果が維持されていた。
複数の心理的な問題	Szendikici (英語)	2011	対象者：臨床場面から推薦された15~18歳の介入群10名と募集した対照群24名 方法：介入群：集団映画療法3回 対照群1：集団映画療法3回 対照群2：介入なし	自己概念の修正/ 幸福感の向上	3本	ランダム化によらない対照群を用いた比較試験	介入群は対照群と比較し、幸福感 (SHS) は介入後も低く、自己知覚 (SpbA) も改善されていない。対照群1・2は介入後、自己知覚が明らかに改善されていないが、対照群1は「運動能力」という下位因子が明らかに改善された ($p < .05$)。映画療法を用いた介入群と対照群1は「親密な交際」という下位因子が改善された ($p > .05$)。
複数の心理的な問題	経 (中国語)	2011	対象者：専門学校生20名 方法：介入群：集団映画療法8回 対照群：介入なし	自己概念の修正/ メンタルヘルスの状態の改善	6本	ランダム化によらない対照群を用いた比較試験 + 質的事例研究	対照群と比較し、介入群は介入後、自己受容 (SAQ) と症状自評量表 (SCL-90) の下位因子における強迫性・人間関係敏感・抑うつ・不安・敵対性・恐怖性・精神病性が明らかに改善された ($p < .05$)。インタビュータからは、対象者のうち15名は、映画療法が非常に役に立ったことが報告された。
家族関係	Ballard (英語)	2012	対象者：既婚夫婦1組 方法：個人映画療法	葛藤の解決	1本	症例報告	コミュニケーションのとおり方が改善され、お互い譲歩することが多くなったことが報告されている。
不安	Dumtrache (英語)	2014	対象者：19~22歳の青年60名 方法：介入群：3ヶ月間の集団映画療法10回 対照群：介入なし	不安の軽減	10本	ランダム化によらない対照群を用いた比較試験	対照群と比較し、介入群は介入後、不安 (HARS) が明らかに軽減された ($p < .05$)。
複数の心理的な問題	Kim (英語)	2014	対象者：高齢者45名 方法：介入群：集団映画療法週1回、合計10回 対照群：介入なし	自己概念の修正/ 抑うつの改善	2本	ランダム化によらない対照群を用いた比較試験 + 調査研究	対照群と比較し、介入群は介入後に自我の統合が向上した ($p < .001$)。また、抑うつが改善された ($p < .001$)。事後に、参加者が映画内容とキャラクターを肯定し、前向きな姿勢で生きようになったと報告された。
教育	Smithikrai (英語)	2016	対象者：第一学期と第二学期の大学生156名 方法：介入群1：15週間の集団映画療法 (一学期) 介入群2：15週間の集団映画療法 (二学期) 対照群1：15週間の社会心理学授業の参加 (一学期) 対照群2：15週間の社会心理学授業の参加 (二学期)	積極性の向上	11本	ランダム化によらない対照群を用いた比較試験	対照群1・2と比較し、介入群1・2は介入後に積極性 (POR)・自己成長主導性 (PGIS) が明らかに改善された ($p < .05$)。
不安症状	張 (中国語)	2016	対象者：不安症を持つ大学生62名 方法：介入群：集団映画療法16回 対照群：なし	不安の軽減	11本	ランダム化比較試験	対照群と比較し、介入群は介入後に不安 (SAS) と状態・特性不安 (STAI) が軽減されたが ($p < .05$)、STAIは両群間で有意差がなかった。介入後3ヶ月の追跡評価では有意差が見られた ($p < .05$)。

表1 (続き)

対象とした問題	著者 (言語)	刊行年	実施方法	治療の目的	作品数	研究デザイン	結果
複数の心理的な問題	郝, 李 (中国語)	2016	対象者: 心理的な問題を持つ大学生 9 名 方法: 集団映画療法 1 回	心的外傷後ストレス障害の改善/ 不安の軽減/抑う つの改善/不眠の 改善	1 本	前後比較デザイン + 調査研究	1 名からは効果がなかったと報告され、事後評価に参加しなかった。8 名は効果があることが報告された。不安 (SAS)・抑うつ (SDS) の方は介入後に改善され、不眠 (AIS) は対象者 6 名中、2 名に改善がみられた。
恋愛関係	馮, 夏 (中国語)	2016	対象者: 恋愛中の大学生 20 名 方法: 集団映画療法 週 1 回, 合計 8 回 介入群: 介入なし 対照群: 介入なし	恋愛関係に対する 態度の修正	8 本	ランダム化によらない 対照群を用いた比較試験	介入群では恋愛主観的な感情 (RpUS) が 5 因子中の「恋愛主観的な感情」「満足度」「平等感」という 4 つの下位因子において、明らかに改善された ($p < .05$)。また、対照群と比較して介入群は介入後「恋愛主観的な感情」が明らかに向上した ($p < .05$)。
恋愛関係	Eğeci & Gençöz (英語)	2017	対象者: 恋人がいる 25~28 歳の女性 6 名 方法: 個人映画療法 3 回	恋愛関係に対する 態度の修正	1 本	質的事例研究	インタビューデータからは映画の鑑賞中から鑑賞後の会話を通じ、対象者がパートナーに同調させたり、自分の意見を理解させたり、自分の反応が相手にどのような影響を与えるかを知らせることができたと報告された。
教育	Setiawati & Warningsih (英語)	2018	対象者: 中学校教諭 方法: 経験に基づく学習による集団映画療法	対処スキルの習得	3 本	質的事例研究 + 調査研究	インタビューデータからは、先生が生徒の感情を処理するスキルを獲得しており、生徒に感情処理を指導できると報告された。
依存症	Correia & Barbosa (英語)	2018	対象者: 依存症のある成人 12 名 方法: 集団映画療法, 合計 6 回	自己達成感の向上	6 本	調査研究	自己達成感尺度から、11 名には、映画療法が有益であり、幸福感をもたらし、彼らは人生をより有意義に感じるようになったと報告された。
挫折	曹 (中国語)	2018	対象者: 挫折しやすい大学生 36 名 方法: 介入群: 集団映画療法 週 1 回, 合計 8 回 対照群 1: 団体活動 週 1 回, 合計 8 回 対照群 2: 介入なし	挫折への抵抗力の 向上	6 本	ランダム化比較試験	対照群 1・2 と比較し、介入群は介入後、挫折への抵抗力が明らかに改善された ($p < .05$)、ソーシャルサポート (SSRS) においては主観的サポートだけが有意に改善された ($p < .05$)。
教育	Kadivar, Mafinejad, Bazzaz, Mirzazadeh, & Jannat (英語)	2018	対象者: 医学部大学生 270 名 方法: 集団映画療法 9 回	課程内容の習得	9 本	調査研究	アンケートより、多数の対象者が映画療法に参加することが良い経験で、医学についてより理解を深められたと述べたことが報告された。
共感	Khusumadewi & Juliantika (英語)	2018	対象者: 共感が欠如している専門学校学生 9 名 方法: 集団映画療法 5 回	共感能力の改善	不明	前後比較デザイン	介入群は介入後に共感の能力が改善された ($p < .05$)。
学業不安	Rimonda, Wibowo, & Jafar (英語)	2018	対象者: 学業不安の中学生 14 名 方法: 介入群: 認知行動理論による集団映画療法, 週 1~2 回, 合計 6 回 対照群: セルフトーク技法の認知行動理論による集団カウンセリング, 週 1~2 回, 合計 6 回	不安の軽減	不明	ランダム化によらない 対照群を用いた比較試験	介入群と対照群はいずれも介入前と比較し、介入後 2 週間の追跡評価で不安 (SAS-A) が軽減された ($p < .05$)。群間差はないが、映画療法は集団カウンセリングより多く不安が改善された。
教育	Davis (英語)	2019	対象者: 小学生 356 名 方法: 介入群 1: 読書療法 6 回 介入群 2: 集団映画療法 6 回 対照群 3: 勉強, 社会的感情及び進路についての授業 6 回	道徳的理解の向上	1 本	ランダム化によらない 対照群を用いた比較試験	介入群 (1・2) と対照群 3 はいずれも道徳的理解 (UCTS) が時間が経つにつれ、高まったが、群間差なし。

表1 (続き)

対象とした問題	著者 (言語)	刊行年	実施方法	治療の目的	作品数	研究デザイン	結果
教育	曹 (中国語)	2019	対象者：看護学専攻大学生 240 名 方法： 介入群 1：集団映画療法 1 回 介入群 2：集団映画療法 1 回 (介入群 1 と異なる映画) 対照群：心理学の授業	生きることの意味 に対する認識の向 上	1 本	ランダム化によらない 対照群を用いた比較試験	介入群 1・2 は介入後、生きることの意味 (MLO) が明らかに向上し (p < .05)、対照群より高く なった (p < .05)。
家族関係	Haddad & Shechtman (英語)	2019	対象者：親との衝突が増加中の中学生 173 名及び 保護者 方法： 介入群 1：カウンセリング週 1 回、合計 10 回 介入群 2：集団映画療法週 1 回、合計 10 回 対照群：介入なし	葛藤の解決/ 幸福感の向上	6 本	ランダム化比較試験	介入群 1・2 は両親との衝突 (CBO) が改善さ れたが、群間差はなかった。対照群と比較し、 介入群 1・2 は介入後に精神的苦痛 (Y-OQ) が 改善されたが、群間差はなかった。
自閉症	Saladino, Sabatino, Iannaccone, Pastorino, & Verrastro (英語)	2020	対象者：10～13 歳の自閉症児 4 名 方法： 二人一組で映画を作り (6 回) + 作った映画で集団映画療 法 (2 回)	社交とコミュニ ケーション能力の 向上	1 本	症例報告	観察的評価において「相互作用」、「社会的一感 情的相互依存」と「遊びと行動」がいずれも介 入前より向上した。
自尊感情	Batubara, Sari, & Eagle (英語)	2020	対象者：高齢者 70 名 方法： 介入群：集団映画療法、合計 6 回 対照群：自尊感情を高められる看護	自己概念の修正	1 本	ランダム化比較試験	自尊感情 (RSES) は、介入群・対照群ともに、 介入後に明らかに改善 (p < .05) されたが、対 照群より介入群のほうが高いと報告された。
吃音	Azios, Irani, Bellon- Ham, Swartz, & Benson (英語)	2020	対象者：19～24 歳の吃音成人 4 名 方法：個人映画療法週 1 回、合計 4 回	自己概念の修正/ 吃音に対する態度 の修正	4 本	前後比較デザイン + 質的事例研究	吃音に関する考えと信念 (UTBAS) は介入後 に改善され、対象者の 4 分の 3 は吃音成人が抱 える困難さ (OASES) も改善された。インタ ビューデータからは、不安症状が緩和され、活 動・参加の頻度も上昇したことが、読み取られ た。
宗教	Arjoni, Basir, & Raklmat (英語)	2020	対象者：孤児院の青少年 20 名 方法： 介入群：集団映画療法 7 回 対照群：カウンセリング 7 回	宗教に対する態度 の修正	不明	ランダム化によらない 対照群を用いた比較試験	対照群と比較して、介入群は介入後に宗教的精 神力 (QRSP) が明らかに向上した (p < .05)。
学業不安	Rimonda, Bulantika, Latifah, & Khasanah (英語)	2020	対象者：学業不安高校生 7 名 方法：集団映画療法 4 回、週 1～2 回	学習に対する感情 の修正	不明	前後比較デザイン	達成関連感情 (AEQ) は介入後に明らかに改 善した (p < .05)。
宗教	Charles, Sari, Dewi, Arjoni, & Zakir (英語)	2021	対象者：高校生 24 名 方法： 介入群：集団映画療法 対照群：カウンセリング	宗教に対する態度 の修正	2 本	ランダム化によらない 対照群を用いた比較試験	対照群と比較して、介入群は介入後に宗教的寛 容が明らかに向上した (p < .05)。
向社会的行動	Herfidawati, Wibowo, & Purwanto (英語)	2021	対象者：向社会的行動低下の高校生 30 名 方法： 介入群 1：集団映画療法 5 回 介入群 2：演劇 5 回 介入群 3：映画療法 + 演劇、5 回	向社会的行動の改善	不明	ランダム化比較試験	介入群 1・2・3 は介入後、向社会的行動が改善さ れた (p < .05)。群間差はなかった。

表2 「不安」と「自己概念」に関連した心理面の介入を行った映画療法に関する研究論文

目的	著者(国)	評価	介入前後の効果
不安症状	Rimonda, Bulantika, Latifah, & Khasanah, 2020 (インドネシア)	達成関連感情尺度 (AEQ)	有意差あり
	Rimonda, Wibowo, & Jafar, 2018 (インドネシア)	自己評価式不安尺度 (SAS)	有意差あり
	Dumtrache, 2014 (ルーマニア)	ハミルトン不安評価尺度 (HARS)	有意差あり
	郇 & 李, 2016 (中国)	自己評価式不安尺度 (SAS)	部分的にはあり
	経, 2011 (中国)*	精神症状評価尺度 (SCL-90)	有意差あり
	張, 2016 (中国)	自己評価式不安尺度 (SAS) 状態-特性不安尺度 (STAI)	有意差あり
	響, 2001 (日本)	不明	あり
自己概念	Batubara, Sari, & Eagle, 2020 (インドネシア)	ローゼンバーグ自尊感情尺度 (RSES)	有意差あり
	Powell, Newgent, & Sang, 2006 (米国)	ローゼンバーグ自尊感情尺度 (RSES)	あり, 有意差なし
	Şendikici, 2011 (トルコ)	青少年自己知覚尺度 (SPPA)	なし
	Kim, 2014 (韓国)	自己統合尺度 (The ego integrity)	有意差あり
	AKA, 2007 (トルコ)	完全主義尺度 (MPS)	有意差あり
	経, 2011 (中国)*	Self-Acceptance Questionnaire (SAQ)	有意差あり
	余 & 張, 2010 (中国)	Self-Acceptance Questionnaire (SAQ) ローゼンバーグ自尊感情尺度 (RSES)	有意差あり
	張, 2008 (中国)	一般セルフ・エフィカシー尺度 (GSES) ローゼンバーグ自尊感情尺度 (RSES)	あり, 有意差なし 有意差あり
その他	Smithikrai, 2016 (タイ)	The Positivity Scale (POS) 自己成長主導性尺度 (PGIS)	有意差あり
	Correia & Barbosa, 2018 (ポルトガル)	Self-completion Evaluation Form	部分的にはあり
	Azios, Irani, Bellon-Harn, Swartz, & Benson, 2020 (米国)	吃音に関する役に立たない考えと信念の評価尺度 (UTBAS) Overall Assessment of the Speaker's Experience of Stuttering (OAESE)	あり, 有意差なし 部分的にはあり
	Haddad & Shechtman, 2019 (イスラエル)	Youth Outcome Questionnaire-2.01 (Y-OQ-2.01)	あり, 有意差なし
	曹, 2018 (中国)	大学生挫折受容質問票	有意差あり
	曹, 2019 (中国)	人生の意味尺度 (MLQ)	有意差あり

註1) *は介入目的が複数ある研究を示す。

註2) 有意差が表記されない論文は対照群を用いた比較試験ではない。

た。トラウマによる不安に関する介入研究(郇, 李, 2016) 1編には部分的に効果があると示され, その他1編のパニック障害に関する症例研究(響, 2001)において効果があると報告された。

また, 映画療法による介入の目的として自己概念に関連した心理面の問題8編において, 介入前後に有意差があったのは6編であった。Self-Acceptance Questionnaire (SAQ)によりセルフアクセプタンスの向上(経, 2011; 余, 張, 2010)が, 完全主義尺度(MPS)により完全主義の緩和(Aka, 2007)が, 自己統合尺度(The ego integrity)により自我の統合(Kim, 2014)が, ローゼンバーグ自尊感情尺度(RSES)により自尊感情の向上(Batubara et al.,

2020; 余, 張, 2010; 張, 2008)が報告された。これら全ての研究において質問紙を用いた介入の効果の検討が行われた。一方, 行動問題のある子ども(平均年齢11.29歳)には同様に, RSESの一部の得点に向上が認められたが, 総合得点には有意差がみられなかった(Powell, Newgent, & Sang, 2006)。

その他の分類にあるように, 積極性(Smithikrai, 2016), 自己成長主導性(Smithikrai, 2016), 吃音に関する役に立たない考えと信念(Azios et al., 2020), 精神的苦痛(Haddad & Shechtman, 2019), 挫折受容(曹, 2018), 人生観の充実(曹, 2019)においても質問紙実施により効果が検証された。しかし, 依存症のある成人12名の

表3 映画療法に関する研究論文の基本属性

種別	内容	数(割合)
発表年 (35編)	2011年～2021年	27編(77.1%)
	2001年～2010年	8編(22.9%)
ケースの年齢 (36ケース)	未成年者	15ケース(41.7%)
	成人	21ケース(58.3%)
	青年期	24ケース(66.7%)
対象の障害・ 問題	神経性やせ症	1ケース(2.8%)
	不安症群	5ケース(13.9%)
	物質使用障害	1ケース(2.8%)
	小児期発症流暢障害(吃音)	1ケース(2.8%)
	自閉スペクトラム症児	1ケース(2.8%)
	恋愛中の者	2ケース(5.6%)
	葛藤のある家族	4ケース(11.1%)
	特定の教育活動を受ける者	5ケース(13.9%)
	宗教観の変化が期待される者	2ケース(5.6%)
	その他	14ケース(38.9%)
映像作品数 (31ケース)	1～5本	19ケース(61.3%)
	6～10本	8ケース(25.8%)
	11～15本	3ケース(9.7%)
	16本～	1ケース(3.2%)
実施方法 (36ケース)	個人療法	4ケース(11.1%)
	集団療法	32ケース(88.9%)

うち、1名については介入後の自己達成感が向上しなかった(Correia & Barbosa, 2018)。吃音者を対象とした研究では、吃音者の「QOL(生活の質)」を測定する「Overall Assessment of the Speaker's Experience of Stuttering(OASES)(Yaruss & Quesal, 2006)が用いられ、4名中3名に効果が認められたことが示された(Azios et al., 2020)。

4. 「不安」と「自己概念」に関連した心理面を扱った論文に使用された映像作品について

「不安」と「自己概念」に関連する心理面の介入を行った研究の映像作品についての概略を表4に示した。

対象論文の20編のうち、使用された映像作品が不明である3編を除いた17編、映像作品71本について述べる。本研究は、映像作品を題材により、喜劇映画、ファンタジー映画(魔法やその他の超自然的、幻想的、空想的な物事の要素を盛り込んだ映像作品)、ドラマ映画(キャラクターの人間関係の発展、ドラマティックなテーマ、心の葛藤などを扱う映像作品)及びドキュメンタリー

映画(取材対象のありのままの姿、事実を記録した映像作品)に分類された。ドラマ映画は35本、喜劇映画は28本、ファンタジー映画は6本、ドキュメンタリー映画は2本であった。映像作品の年代については、論文発表年から過去20年以内の映像作品のみを使用していた研究は11編であり(Kim, 2014; 郇, 李, 2016; Şendikici, 2011; Aka, 2007; 余, 張, 2010; 経, 2011; 張, 2016; Correia & Barbosa, 2018; Haddad & Shechtman, 2019; 曹, 2018; 曹, 2019)、部分的に過去20年以内の映像作品を使用していた研究は4編(Azios et al., 2020; 響, 2001; 張, 2008; Smithikrai, 2016)、論文発表から20年以上前の映像作品のみ採用されたのは2編(Powell et al., 2006; Batubara et al., 2020)であった。自国の映像作品のみを採用した研究は5編、部分的に自国の映像作品を採用した研究は4編、他国の映像作品のみを採用した研究は8編であった。

考察

まず、抽出された35編の研究のうち、77.1%が2011年から2021年に発表されたものであったことが示された。36ケースの介入の中で、年齢の分類では、青年期が66.7%を占めていたことが示された。青年期は、アイデンティティをはじめとし、自己にとって重要な自己概念を形成する時期であることが指摘され(Erikson, 1959)、特に他者からの評価が気になるといった側面が高いという傾向がみられる(三田, 2004)。実施方法による分類では、88.9%の研究で集団療法が行われていた。他者と交流する機会を提供できることから、集団療法が選択されたことが推測される。61.3%の研究で1～5本の映像作品が用いられているが、これが映画療法に適切な量であるかどうかについては、今後の検討が必要である。介入の対象とされた障害・問題については、最も多く扱われたのが特定の教育活動を受ける者(13.9%)と不安症群(13.9%)であった。また、エビデンスレベルの高いRCTによる不安症群を対象とする研究から効果があることが示された。続いて葛藤がある家族(11.1%)に多く適用されていた。家族関係について、光元・岡本(2011)が家族内の葛藤は青年期前期から増加することを報告しており、本研究でも映画療法の対象にされていることが明らかにされた。また、青年期では、教育目的のために、映画が適切な媒体となり得ることも示唆された(Smithikrai, 2016; Davis, 2019; Kadivar, Mafinejad, Bazzaz, Mirzazadeh, & Jannat, 2018; Setiawati & Winingsih, 2018)。

さらに、今回、吃音の心理的な問題に関わると考えた「不安の軽減」と「自己概念形成の促進」は、吃音以外の問題のある人の心理的問題を取り扱う映画療法でもし

表4 「不安」と「自己概念」に関連した心理面の介入を行った研究の映像作品について

種別	内容	数
題材	ドラマ映画	35本 (49.3%)
	喜劇映画	28本 (39.4%)
	ファンタジー映画	6本 (8.5%)
	ドキュメンタリー映画	2本 (2.8%)
制作年代	発表前20年以内の映像作品のみ採用	11編 (64.7%)
	部分的に発表前20年以内の映像作品が採用	4編 (23.5%)
	発表前20年以上前の映像作品のみ採用	2編 (11.8%)
映像作品が制作された国	自国の映像作品のみ採用	5編 (29.4%)
	部分的に自国の映像作品が採用	4編 (23.5%)
	他国の映像作品のみ採用	8編 (47.1%)

ばしば指導の目的になることが分かった。しかし、その多くは学業の不安 (Rimonda et al., 2020; Rimonda et al., 2018) や学生の生活から学業までの全般的な不安 (Dumtrache, 2014; 経, 2011; 張, 2016) であり、吃音において問題となる社交不安とは異なっていた。Azios et al. (2020) の研究では社交不安に効果があるという結果が得られたことから、映画療法の社交不安への効果については今後も詳細な検討が必要である。自己概念の促進については、吃音治療における重要な心理的側面として認められており (太田・長澤, 2004a; 太田・長澤, 2004b; 松岡・武藤, 2020)、自尊感情の向上 (Batubara et al., 2020; 余, 張, 2010; 張, 2008) やセルフアクセプタンスの向上 (経, 2011; 余, 張, 2010) が60%を占めている。

効果検証に用いられた尺度について、不安の軽減にはSCL-90, SAS, STAI等の不安状態を評価できる尺度が用いられていたが、それらの尺度は吃音者の心理的問題を対象とした介入でも用いられることが報告されている (Blumgart, Tran, & Craig, 2014; Brady, Price, McAllister, & Dietrich, 1989; Rodgers, 2019; Mulcahy, Hennessey, Beilby, & Byrnes, 2008)。一方、自己概念を対象とした効果検証では、RSESとSAQが複数の研究に用いられていた。RSES (Blood, Blood, Tramontana, Sylvia, Boyle, & Motzko, 2011; 太田・長澤, 2004a) とSAQ (太田・長澤, 2004b) は、吃音者の自己概念の変化を評価するために用いられることが知られている。その他、吃音者の信念や全般的な影響を評価するため、UTBASとOASESが映画療法の実施後にも用いられた (Azios et al., 2020)。心理症状を対象とした映画療法と吃音治療で用いられる評価尺度が比較的一致していた点は、今後、吃音を対象とした映画療

法で効果を検討する際の参考となる。RCTを実施した4編のうち、1編 (Haddad & Shechtman, 2019) は効果が認められたが、有意差はなかった。それ以外の3編 (張, 2016; Batubara et al., 2020; 曹, 2018) は有意差のある効果が認められた。全体から見ると、不安への介入効果は全研究で認められていたが、自己概念やその他の心理面の改善や向上については、多数の研究で有意差が見られたものの、有意差が見られなかった研究 (Powell et al., 2006; 張, 2008; Azios et al., 2020; Haddad & Shechtman, 2019) や、効果が得られなかった研究 (Şendikici, 2011) もあった。

映画の題材に関しては、約90%と多くの研究において、ドラマと喜劇題材が選定されていた。喜劇映画は他の映画と比較し、人の感情を動かし積極的な影響を及ぼす可能性があると考えられる (Adams & McGuire, 1986)。ドラマ映画は通常長編であり、映画のストーリー性に重点が置かれることで、感情移入しやすいことが想像される。集団療法における映画視聴後の話し合いの場面でも、話が弾みやすかったことが推測される。このように、喜劇とドラマ映画はいずれも、観た者の感情をポジティブに動かし、それが治療効果につながったのではないかと考える。映像制作国については、半数以上 (合計9編) の研究は全部または部分的に自国の映像作品を選択しており、自国の映画の方が馴染みやすかったり、理解しやすかったりして、感情的に影響を受けやすい可能性があること (Yazici, Ulus, Selvitop, Yazici, & Aydin, 2014) が示唆された。半数以上 (11編) の研究において、論文発表年から過去20年以内に公開された映画作品が選定されていた。アメリカでのミレニアル世代の者への調査より、1940年代や50年代の映画を観た者は4分の1以下で、年代の古い映画を好まない傾向があることが報告された (New York Post, 2017)。そのため、対象者によって映像作品の制作年を考慮する必要があると考える。

最後に、抽出した論文の研究結果を踏まえると、映画療法の実施は複数の障害や問題に幅広く用いられていたと言える。特に、不安の軽減及び自己概念に関する心理面の向上を目的として適用され、多数の先行研究から効果があることが認められた。また、感情・認知・人間関係において積極的な改善が得られたことが報告されたことから、不安や自己概念の動揺がある吃音者への介入の選択肢になることも期待される。しかし、現在までに、吃音への介入研究は1件のみであり (Azios et al., 2020)、介入効果については未知数である。Azios et al. (2020) は参加者1名のOASESの結果において、全領域がポジティブな変化を示したわけではないことから、この療法が全ての吃音者に効果的であるとは言えない可能性につ

いても述べている。

さらに、吃音の心理面への介入をする際に、ドラマ映画または喜劇映画で、自国の映像作品であり、比較的近年に公開されたもの、という特徴を手掛かりに映像作品を採用することが適切であると考えられた。しかし、吃音者を対象として行われた映画療法の研究が1編(英語)しか検索されず、日本語での論文は見当たらなかった。さらに、多くの研究では成人を対象としており、集団療法が多数で個人療法の研究は少なかった。

従って、映画療法は吃音者の心理面への影響があることを推測できるが、現時点では、吃音治療として有効かどうか、心理臨床で使用されている方法や手続きを適用することの妥当性について判断することが困難な状況である。今後は、映画療法による吃音治療への適用可能性を判断するために、心理臨床で効果が報告されている症状と同様の症状に対し、予備的な介入研究を試みたいと考える。

利益相反自己申告：申告すべきものなし。

参考文献

- 服部祥子 (2000) 生涯人間発達論—人間への深い理解と愛情を育むために、医学書院。
- 響玲於那 (2001) Iig-14 心身医学をベースにしたウェルネス・ムーブメントへの歩み (10) : パニック障害者とその家族への映画療法の試み (精神科), 心身医学, 41, 164.
- 松岡里紗・武藤崇 (2020) 成人期の吃音に対するアクセプタンス & コミットメント・セラピーによる心理・社会的介入の可能性, 心理臨床科学, 10(1), 27-37.
- 三田英二 (2004) 青年期における女性の自己形成, 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 18-W, 1-75.
- 光元麻世・岡本祐子 (2011) 青年期の家族内葛藤と家族アイデンティティ発達の関連, 広島大学心理学研究, 10, 217-228.
- 大仁田あずさ・三成由美・崔光善 (2012) 女子大学生の自尊感情と食行動の自己効力感が摂食行動に及ぼす効果, 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, 44, 1-8.
- 太田真紀・長澤泰子 (2004a) 学齢期における吃音児の自尊感情の発達：非吃音児の自尊感情との比較, 特殊教育学研究, 42(4), 259-270.
- 太田真紀・長澤泰子 (2004b) 吃音児・者における肯定的自己評価の促進要因：成人吃音者に対する質問紙調査, 特殊教育学研究, 41(5), 465-474.
- 富岡比呂子 (2013) 児童の自己概念と自己効力感—学校適応感との関連性について—, 創大教育研究, 22, 79-93.
- 曹晁侯 (2018) 大学新生挫折承受能力現状及电影治疗对大学生挫折承受能力的影响, 皖南医学院博士論文。
- 曹楠 (2019) 电影疗法对高职护生生命意义感的渗透作用, 卫生职业教育, 37(09), 123-125.
- 鄒紅梅・李艷琴 (2016) 电影疗法调适大学生心理创伤的实验, 中华医学图书情报杂志, 025(005), 43-45.
- 馮伟・夏珊珊 (2016) 电影疗法在改善大学生恋爱主观感受中的运用, 心理技术与应用, 000(003), 189-192.
- 経承鳳 (2011) 电影审美欣赏对中职学生自我接纳影响的实验研究, 西南大学博士論文。
- 余青雲・張高波 (2010) 电影疗法对 16 例未成年犯心理健康状况的干预, 商丘职业技术学院学报, (01), 35-37.
- 張愛寧 (2008) 观影疗心—电影在心理咨询与治疗中的应用, 华东师范大学博士論文。
- 張玲 (2016) 电影疗法对大学生焦虑的影响研究, 四川师范大学博士論文。
- Abedin, A. & Molaie, A. (2010) The effectiveness of group movie therapy (GMT) on parental stress reduction in mothers of children with mild mental retardation in Tehran, *Procedia-Social and Behavioral Sciences*, 5, 988-993.
- Adams, E. R. & McGuire, F. A. (1986) Is laughter the best medicine? a study of the effects of humor on perceived pain and affect, *Activities, Adaptation, and Aging*, 8(3), 157-167.
- Aka, B. T. (2007) The effect of cinematherapy on perfectionism and related schemas, *Turk Psikoloji Dergisi*, 25(65), 78-81.
- American Psychiatric Association (2013) *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (5th ed.)*. American Psychiatric Association. (高橋三郎・大野裕監訳 (2015) *DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル*. 医学書院.)
- Arjoni, Basir, G., & Rakhmat, C. (2020) Strengthening Islamic moral (akhlak) of orphanage adolescents through group guidance activities with religious spiritual cinematherapy techniques, *The 1st Progress in Social Science, Humanities and Education Research Symposium (PSSHRS 2019)*.
- Azios, M., Irani, F., Bellon-Harn, M., Swartz, E., & Benson, C. (2020) The utility of cinematherapy for stuttering intervention: An exploratory study, *Seminars in Speech and Language*, 41(5), 400-413.
- Ballard, M. B. (2012) The family life cycle and critical transitions: Utilizing cinematherapy to facilitate understanding and increase communication, *Journal of Creativity in Mental Health*, 7(2), 141-152.
- Batubara, I., Sari, N. Y., & Eagle, M. (2020) The effect of cinematherapy-based group reminiscence on older adults' self esteem, *Indonesian Journal of Global Health Research*, 2(4), 335-342.
- Berg-Cross, L., Jennings, P., & Baruch, R. (1990) Cinematherapy: Theory and application, *Psychotherapy in Private Practice*, 8, 135-157.
- Bierman, J. S., Krieger, A. R., & Leifer, M. (2003) Group cinematherapy as a treatment modality for adolescent girls, *Residential Treatment for Children & Youth*, 21(1), 1-15.
- Blood, G. W., Blood, I. M., Gabel, R. M., & Tellis, G. M. (2003) A preliminary study of self-esteem, stigma, and disclosure in adolescents who stutter, *Journal of Fluency Disorders*, 28(2), 143-159.
- Blood, G. W., Blood, I. M., Tramontana, G. M., Sylvia, A. J., Boyle, M. P., & Motzko, G. R. (2011) Self-reported experience of bullying of students who stutter: Relations with life satisfaction, life orientation, and self-esteem, *Percept Mot Skills*, 113(2), 353-364.
- Blumgart, E., Tran, Y., & Craig, A. (2010) Social anxiety disorder in adults who stutter, *Depress Anxiety*, 27(7), 687-692.
- Blumgart, E., Tran, Y., & Craig, A. (2014) Social support and its association with negative affect in adults who stutter, *Journal of Fluency Disorders*, 40, 83-92.
- Brady, J. P., Price, T. R., McAllister, T. W., & Dietrich, K. (1989) A trial of verapamil in the treatment of stuttering in adults, *Biological Psychiatry*, 25(5), 630-633.
- Charles, C., Sari, I., Dewi, M., Arjoni, A., & Zakir, S. (2021) The use of cinematherapy techniques in developing religious tolerance in students with multicultural education insights, *Proceedings of the 2nd EAI Bukittinggi International Conference on Education*.
- Correia, A. F. & Barbosa, S. (2018) Cinema, aesthetics and narrative: Cinema as therapy in substance use disorders, *The Arts in Psychotherapy*,

- 60, 63–71.
- Davis, A. P. (2019) Comparing the use of cinematherapy and bibliotherapy to teach character education: A quasi-experimental study, *The University of Alabama*.
- Dermer, S. B. & Hutchings, J. B. (2000) Utilizing movies in family therapy: Applications for individuals, couples, and families, *American Journal of Family Therapy*, 28, 163–180.
- Dumtrache, S. D. (2014) The effects of a cinema-therapy group on diminishing anxiety in young people, *Procedia-Social and Behavioral Sciences*, 127, 717–721.
- Eğeci, İ. S. & Gençöz, F. (2017) Use of cinematherapy in dealing with relationship problems, *The Arts in Psychotherapy*, 53, 64–71.
- Erikson, E. H. (1959) Identity and the life cycle: Selected papers, *Psychological Issues*, 1, 1–171.
- Fenn, K. & Byrne, M. (2013) The key principles of cognitive behavioural therapy, *InnovAiT*, 6(9), 579–585.
- Gramaglia, C., Abbate-Daga, G., Amianto, F., Brustolin, A., & Fassino, S. (2011) Cinematherapy in the day hospital treatment of patients with eating disorders. Case study and clinical considerations, *The Arts in Psychotherapy*, 38(4), 261–266.
- Guitar, B. & Bass, C. (1978) Stuttering therapy: The relation between attitude change and long-term outcome, *The Journal of speech and hearing disorders*, 43(3), 392–400.
- Gupta, S. K. (2016) The efficacy of cognitive behavior therapy in an adult who stutters, *Indian Journal of Psychiatry*, 58(4), 477–478.
- Haddad, L. T. & Shechtman, Z. (2019) Movies as a therapeutic technique in school-based counseling groups to reduce parent-adolescent conflict, *Journal of Counseling & Development*, 97(3), 306–316.
- Hattie, J. A. (1992) *Self-concept*, Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Herfidawati, I., Wibowo, M. E., & Purwanto, E. (2021) The effectiveness of group guidance with cinematherapy and role-playing techniques to improve prosocial behavior, *Jurnal Bimbingan Konseling*, 10(2), 99–105.
- Kadivar, M., Mafinejad, M. K., Bazzaz, J. T., Mirzazadeh, A., & Jannat, Z. (2018) Cinemedicine: Using movies to improve students' understanding of psychosocial aspects of medicine, *Annals of Medicine & Surgery*, 28, 23–27.
- Khusumadewi, A. & Juliantika, Y. T. (2018) The effectiveness of cinema therapy to improve student empathy, *Proceedings of the 2nd International Conference on Education Innovation (ICEI 2018)*.
- Kim, H. G. (2014) Effects of a cinema therapy-based group reminiscence program on depression and ego integrity of nursing home elders, *Journal of Korean Academy of Psychiatric & Mental Health Nursing*, 23(4), 233.
- Marsick, E. (2010) Cinematherapy with preadolescents experiencing parental divorce: A collective case study, *Arts in Psychotherapy*, 37(4), 311–318.
- Menzies, R. G., Onslow, M., Packman, A., & O'Brian, S. (2009) Cognitive behavior therapy for adults who stutter: A tutorial for speech-language pathologists, *Journal of Fluency Disorders*, 34(3), 187–200.
- Moulton, E., Heath, M. A., Prater, M. A., & Dyches, T. T. (2011) Portrayals of bullying in children's picture books and implications for bibliotherapy, *Reading Horizons*, 51(2), 118–148.
- Mulcahy, K., Hennessey, N., Beilby, J., & Byrnes, M. (2008) Social anxiety and the severity and typography of stuttering in adolescents, *Journal of Fluency Disorders*, 33(4), 306–319.
- Niemiec, R. M. & Wedding, D. (2008) *Positive Psychology at The Movies: Using Films to Build Virtues and Character Strengths*, Hogrefe.
- Powell, M. L., Newgent, R. A., & Sang, M. L. (2006) Group cinematherapy: Using metaphor to enhance adolescent self-esteem, *Arts in Psychotherapy*, 33(3), 247–253.
- Rimonda, R., Wibowo, M. E., & Jafar, M. (2018) The effectiveness of group counseling by using cognitive behavioral therapy approach with cinematherapy and self-talk techniques to reduce social anxiety at SMK N2 Semarang, *Jurnal Bimbingan Konseling*, 7(2), 145–152.
- Rimonda, R., Bulantika, S. Z., Latifah, H., & Khasanah, I. (2020) The influence of cinematherapy against academic anxiety in students, *Jurnal Inspirasi Pendidikan*, 10(1), 57–62.
- Rodgers, N. H. (2019) *Cognitive bias and stuttering in adolescence*, The University of Iowa.
- Saladino, V., Sabatino, A. C., Iannaccone, C., Pastorino, G., & Verrastro, V. (2020) Filmmaking and video as therapeutic tools: Case studies on autism spectrum disorder, *The Arts in Psychotherapy*, 71, 101714.
- Schulenberg, S. E. (2003) Psychotherapy and movies: On using films in clinical practice, *Journal of Contemporary Psychotherapy*, 33(1), 35–48.
- Şendikici, S. (2011) The effect of cinematherapy on self-perception among adolescents: Applications in clinical and non-clinical samples, *Middle East Technical University*.
- Setiawati, D. & Winingsih, E. (2018) Cinema therapy to improve the counselor's understanding about dealing with feeling skills for students, *1st International Conference on Education Innovation (ICEI 2017)*.
- Smithikrai, C. (2016) Effectiveness of teaching with movies to promote positive characteristics and behaviors, *Procedia-Social and Behavioral Sciences*, 217, 522–530.
- Stein, M. B., Baird, A., & Walker, J. R. (1996) Social phobia in adults with stuttering, *American Journal of Psychiatry*, 153, 278–280.
- New York Post (2017) Millennials don't really care about classic movies., August 16, 2017, <https://nypost.com/2017/08/16/millennials-dont-really-care-about-classic-movies/> (Retrieved October 9, 2010).
- Yang, H. & Lee, Y. (2005) The use of single-session cinematherapy and aggressive behaviour tendencies among adopted children: A pilot study, *American Journal of Recreation Therapy*, 4(1), 35–44.
- Yaruss, J. S. & Quesal, R. W. (2006) Overall assessment of the speaker's experience of stuttering (oases): Documenting multiple outcomes in stuttering treatment, *Journal of Fluency Disorders*, 31(2), 90–115.
- Yazici, E., Ulus, F., Selvitop, R., Yazici, A. B., & Aydin, N. (2014) Use of movies for group therapy of psychiatric inpatients: Theory and practice, *International Journal of Group Psychotherapy*, 64(2), 254–270.

(受付日 2022 年 2 月 15 日, 受理日 2023 年 1 月 19 日)

Effects of cinematherapy on anxiety and self-concept: A literature review with application to the treatment of stuttering

Yuan Chen¹, Mizuki Aoki¹, Hitomi Nishino¹, Shoko Miyamoto²

¹ Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

² Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba

Abstract: This study is a review of research papers on cinematherapy. It aims to identify the ways in which cinematherapy can be applied to stuttering. It also aims to obtain information on the use of cinematherapy for anxiety and self-concept related to stuttering. We analyzed thirty-five papers that met the selection criteria. The results showed that cinematherapy is effective for several disorders and problems including intervention for stuttering. Twenty papers on anxiety and self-concept related to mental health problems indicated that cinematherapy had a positive effect on anxiety and self-concept, such as relieving trait anxiety and improving perfectionism. These similar effects have also been observed in the cinematherapy for stuttering intervention. It is possible that the cinematherapy can be applied to treating the psychological problems of stuttering, especially for the purpose of encouraging changes in self-concept. In the future, it is important to report the psychological and clinical effects of cinematherapy on stuttering, with reference to previous studies in this regard.

Key words: stuttering, psychological aspect, anxiety, self-concept, effects, cinematherapy